



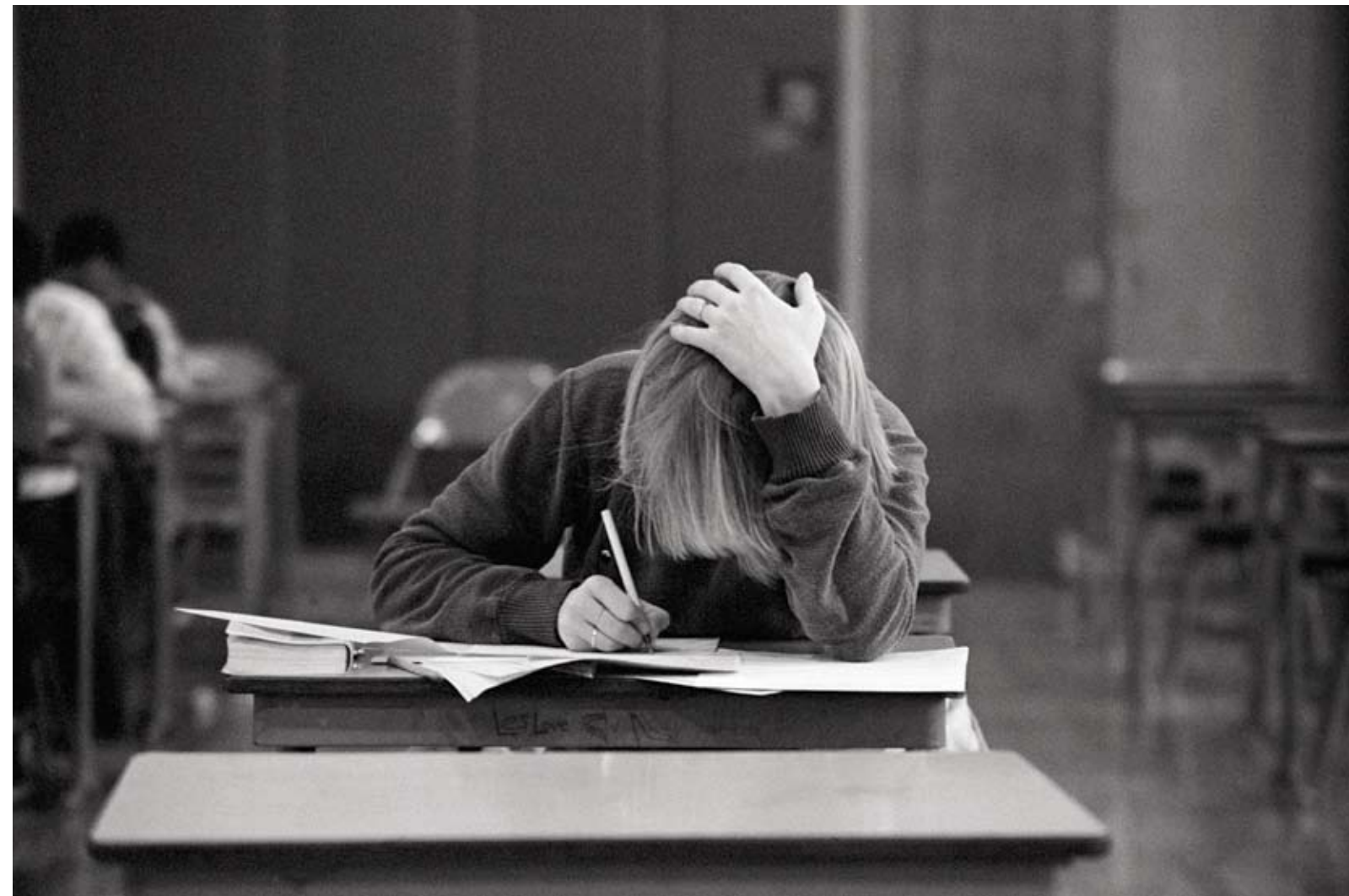
60年代後半から70年代にかけて、  
 アメリカのハイスクールに通う  
 ごくごく普通のティーンエイジャーを  
 間近で撮り続けたひとりの高校教師がいる。  
 写真家、ジョセフ・ザボは、  
 青春の真っ只中を生きる世代特有の日常を、  
 リアルに、そして見事に捉えた。

*"In order to close this gap,  
 I bought my camera to school.  
 The camera brought us closer together."*

# JOSEPH SZABO TEENAGE KICKS

Text / Kunichi Nomura  
 Edit / Hiroshi Kagiyama (EATer) Thanks / M+B Gallery (www.mbfala.com)

「生徒たちとの溝を埋めるために私はカメラを学校に持ち込んだわけだ」(ジョセフ・ザボ)



*"Cameron Crowe said  
"Nothing last forever, except high school.""*

「キャメロン・クロウがかつてこう言ったよ。「何事も永遠ではない、高校を除いてはね」と(ジョセフ・ザボ)

**JOSEPH SZABO**  
TEENAGE KICKS



*"The teenage life is a phase of existence where the person starts to bloom, starts perhaps to discover his/her strengths."*

「ティーンの時というのは、その人間というつぼみが開き、自分の強さを発見する時なんだと思う」(ジョセフ・ザボ)

**JOSEPH SZABO**  
**TEENAGE KICKS**

## その後の人生を変えた、 一枚の少女のポートレイト

1969年、ウッドストックが開催されサマー・オブ・ラブ、ヒッピーカルチャーがその頂点を極めた年に撮られた枚の写真がある。プリシラと名付けられたその写真はフェスティバルの会場であろうか、野外の人ごみを背に入る少女が写っている。当時の流行であり、うの中分けの長髪を前に垂らし、下り下がったパンツを引き上げる、十代前半の少女。口にはくわえタバコ、ちょっとしかめ気味に遠くを見る表情は、実際の歳より背伸びするティーンエイジャー特有の顔。子供以上、大人未満そんな人生の中で数年しかない、エウアーグリーンとも称される青春の瞬間。やがてその写真は30年後、あるロックバンドのメジャーデビューのアルバムカバーを飾り、全世界に知られることになった。バンドはオルタナロックの先駆者の一人としてボストンシーンを引っ張っていた変人J・マズシス率いるダイナソー・ジュニア。アルバムのタイトルは「GREEN MIND」(注1)。そこで鳴る爆音「イズギター」とポップなメロディ、相反する2つの要素がそのアルバムカバーの写真には詰まっていた。

この写真を撮ったフォトグラファーの名前がジョセフ・ザボ。日本ではまだそんなに知られていないが、作風と反して長いキャリアを持つフォトグラファーだ。ザボの作風の特徴としてはなんといっても自身が高校の教師をしていたことから、一番近い存在であった生徒達の姿を撮り続けたこと。彼の写真を見るとティーンエイジャーとはどういう時代であったかを思い出させてくれる。1944年に生まれたザボはユ

ーヨークのブラット・インスティテュートで写真を学び、1968年にそこを卒業した後、1972年から1999年までニューヨークのロングアイランドにあるマルヴァーン高校で写真科の教師として教壇に立つ人生を送ってきた。「僕の高校にいた美術の先生が写真に興味を持つきっかけだったんだ。彼はイヤーブック(卒業アルバム)の制作をする写真部の顧問でね、それから写真を撮りだしたんだ。その頃撮っていたものは僕のティーン時代の友達、男の子や女の子、自分達の生活、家族にベット、そして僕の妻となるナンシー(笑)」

自分の身の回りの世界を被写体としてスナップすることがザボのフォトグラファーとしての出発点であり、それがそのまま彼の人生そのものとなっていく。「アート担当の責任者が写真部を作ってみたらどう?」と聞いてきて、それに私は飛びついたわけなんだよ。その次の年には彼女が暗室も部屋もちゃんと作り、写真の授業のカリキュラムも組んでみたらと言ってきたね、喜んで始めたというわけだ」

そうしてザボは自分の一番身近な存在となった生徒達の日常を撮り始めることとなった。

「生徒達を撮るといのはもちろん自分の職場が学校だったということが大きい。生徒と彼らの教師たる私の間には確固たる溝があることに気付いていた。その溝を埋めるために私はカメラを学校に持ち込んだわけだ。アートの授業中に私が彼らの写真を撮り始めると、喜んで、興奮したりするのがよくわかった。カメラが私達をより近い存在にしてくれたわけだ。そ

して時が経つにつれ、ティーンエイジャーを撮るということにアートの可能性を感じるようになった。カメラを持ちティーンエイジャーたる彼らについて学び、接することが私のアーティストとしての生き方の方向を定めたといえるね。そして毎年出会うことになる新しく担当する生徒達との繋がりを築くのはとても大切なことだった。新しい自分の生徒達のことをもっとパーソナルなレベルで知り、信頼関係を持つというのは、自分が彼らにとってより良い教師となる意味においてもとても大切なことだった。それを毎年繰り返し続けるうちに30年近くの日が経っていたというわけなんだ。そしてそれとともに、70、80、90年代のティーンエイジャー達を知るうえで重要な意味を持つことになればと願う私の作品の骨組みができてきたというわけなんだ。それ以外にもストーンズのファンを撮ったりもしたがね。ロックコンサートという、まあ特殊な環境の中で彼らティーンエイジャーの洋服へのこだわりや、行動、人生やライフスタイルといったものを違った角度から見、捉えることのできるいい機会だと思っ

ていたから」

そうしてザボの取り組みが最初に形になったのが1978年に出版された『Almost Grown』(注2)。日本語に訳すと、ほぼ大人」ともいえるこの本はハーモニー・ブックスから出版された。小ぶりともいえる判型のこの写真集は高い評価を受け、全米図書協会からその年のベストブックリストの一冊に選ばれた。学校の廊下や教室、駐車場でのティーンエイジャーの姿。ここではファッションに目覚め、濃いメイクをし、煙草を吸いながら、男の子から男にな

てきたから」

そうしてザボの取り組みが最初に形になったのが1978年に出版された『Almost Grown』(注2)。日本語に訳すと、ほぼ大人」ともいえるこの本はハーモニー・ブックスから出版された。小ぶりともいえる判型のこの写真集は高い評価を受け、全米図書協会からその年のベストブックリストの一冊に選ばれた。学校の廊下や教室、駐車場でのティーンエイジャーの姿。ここではファッションに目覚め、濃いメイクをし、煙草を吸いながら、男の子から男にな

るその過渡期である姿が無防備に取められている。この写真集は一度は市場から姿を消すも、やがてイギリスやアメリカのファッション・フォトグラファーの間でカルトヒットとなり、中古市場で高値で取り引きされるまでになった。

## 少しいきがった 普通のティーンを長期間にわたって追いつけた

ティーンの日常を切り撮った名作は過去にも存在する。例えばフォトグラファー集団「マグナム」に所属し、数々の傑作写真集を発表したブルース・デヴィッドソン。彼には1959年に撮影したブルックリンの不良少年達の姿を収めた名作『ブルックリン・ギャング』(注3)がある。そこにはティーンの不不良達の姿が街の中で生き生きと躍動する姿が焼き付けられている。その年の夏でしかきつと見ることでできない姿。次の夏にはもう高校を卒業しているかもしれない。髪型も仕草もまったく別のもものなっているのかもしれない。そんな彼らの夏の瞬間が切り撮られている。海辺で斜に構えくわえタバコ、

棧橋の下で彼女と寝転ぶ。大きすぎるほどのサンゲラスをかけ、必要以上に鏡の前で髪型を気にする姿。このデヴィッドソンの写真集もアメリカの不良少年のイメージを決定づける傑作として、未だに雑誌等でよく使われているが、デヴィッドソンの写真が街で集う不良達のひと夏を追ったのに対し、ザボのそれはアメリカの郊外都市で見られたであろう普通のティーンがちよつとイキがる、日常の姿を長期間に渡って追ったという違いがあり、それこそ

なくしたのかといえれば決してそうではない。

「彼らティーンエイジャーは僕にとってどんな存在か? 友人のカメラマンクロウがこう言ったよ。『何事も永遠ではない、高校を除いてはね』。ティーンの時というものは、その人間というつぼみが開き、自分の強さを発見する時なんだと思う。この時代を経て僕らは大人へとなっていくんだよ、もちろんそれぞれかかる時間も方法も違うと思うが。そしてまさにこの時代にこそ、他人を敬い愛すことでなり得る、最良の人間になれる時なんだと思う」とザボも語っている。

確かに時代の変化とともにティーンとそれをとりまくティーンエイジャールチャーは、ここ最近変わってきているのかもしれない。それでもどの時代においてもその年代だけがもつ本質というものは変わっていないのではないか? だからこそザボの写真はいくつもの時代を経ていながらも違和感なく繋がりを持ち、それを見た人々のノスタルジアを引き出すのだといえる。例えば、似合わないファッションに身を包みその存在を誇示するティーン

の姿。ファッションを通じて自分を表現する、その始まりがティーンの時時代といえる。歳を重ね、なるだけシンプルに、あまり着飾りたくないと思うようになるのが普通であり、むやみに自己主張し、派手な格好をしたティーン頃の写真是気恥ずかしささえ覚えたりする。まるで自分自身の写真を見たときのように。そう、ザボの撮った写真には普遍的なティーン

## 時代とともに変化する ティーンエイジカルチャー

長年学校に勤めながらティーン達を間近に見てきたザボにとって、ここ最近の変化というのは決して手放しで喜べるものではないらしい。かつてないほどの情報量と全世界に広がるブランドの巨大化が、ティーンだけでなくすべての人間の本質をも変えてきているともいえる。とはいえ、それでもティーンの時

散らばる郊外に住むティーン

散らばる郊外に住むティーンのちよつとした日常のたわいもない瞬間を、切り撮ったもの。当事者達はその瞬間を生きたことで、一杯でそのイベントでもない普通の日常を映し出すものというのには思いのほかさない。被写体に限りなく近く、一緒に日常を過ごしながら、傍観者としてその瞬間を切り撮ることは想像に反して限りなく難しい行為だといえる。そこには彼らの姿をテーマに沿って撮ろうといった作爲的なものが匂わない。だからこそザボの写真は、その生きていた頃には気付きもしなかった、永遠に続くかと思われたあの時代、しかし一瞬で終わり、願っても決して戻れることのないその時代を記録したものである。唯無二の存在であり、その時代を描きしようとする者に熱烈な支持を受けられることとなった。

## 次代のアーティスト達を 心酔させた、 ザボの孤高な世界観

例えば青春映画の傑作を撮り続けるカメラマンクロウはザボの熱心なファンである。彼が自分のティーン時代をベースに書いた傑作映画『あの頃ペニー・レイント』(注4)の原題は『Almost Famous』。有名になる直前のバンドを評した言葉ではあるが、ザボの『Almost Grown』と非常に近いものがある。ちなみにクロウはザボの過去の作品を冊にまとめたベスト版ともいえる写真集『TEENAGER』(注5)で序文を寄せてもいる。また『ヴァージン・スーアイズ』でティーン

葛藤、成長を巧みにとらえたマイク・ミルズもザボの写真的ファンを公言しており、自身の写真スタイル、映画製作に大きな影響を受けている。

現代にもザボと同じように、尖っては傷つく、そんなティーン

葛藤、成長を巧みにとらえたマイク・ミルズもザボの写真的ファンを公言しており、自身の写真スタイル、映画製作に大きな影響を受けている。

現代にもザボと同じように、尖っては傷つく、そんなティーンの心情を近い立ち位置で撮るフォトグラファーもいる。ニューヨークから慧星のごとく現れ、久しぶりに登場した大型新人としてもはやされているライアン・マギンリー。彼は自らがティーンであると同時に、自分の周りにいたティーン達を被写体を選び、その年代が持つ雰囲気、感情を同じ視線で写真に落とし込んだ。そしてその視線こそがマギンリーを特別なフォトグラファータらしめている。

しかしなぜ人はこうもこの時代にノスタルジアを抱くのか? 大人になつてなくしたものの大きさに、写真や映画を見て初めて気付くからなのかもしれない。ティーンエイジカルチャーは常にティーン自身が決めてきた。そこに東も西もあまり関係がない。ただそのわずかに数年の蒼い時の中で、時には突っ張り、時には反抗しながら、自分自身のアイデンティティはどこにあるのか? 自分は何者なのか? それを探る過程で彼らは精神一杯の背伸びを、できる限りの個性をその行動や外見で示そうとする。そういった感情も歳を取るたびに薄れだんだん工夫も努力もしなくなっていく。最近のファッションでもヴィンテージの服やアイビールックが流行するのは、大人買いの影響が大きいとよく言われるが、ティーン



(注6) 『サムサッカー -17歳、フツーに心配な僕のミラー-』(ソニー・ピクチャーズエンタテインメント) グラフィックやCM、ミュージックビデオ界の鬼才として知られるマイク・ミルズの監督第一作。西海岸な雰囲気はそのままだ、指をしゃぶることを止められない少年の成長を描く正統派青春映画であり、ミルズの才能を証明した一作。DVD¥3,990 © 2005 SCARED LITTLE ANIMALS,LLC. ALL RIGHTS RESERVED.



### JOSEPH SZABO

1944年生まれ。ブラット・インスティテュートで写真を学び、その後ニューヨークはロングアイランドにあるマルヴァーン高校にて教職に就き、1972年から1999年にわたり写真の授業を受け持つ。その間に撮りためた生徒の写真で『Almost Grown』を出版。全米図書協会より「ベストブック」賞を授かる。MoMAやヴェンナーレでも作品が展示される第一線のフォトグラファーとして精力的な活動を続け、現在ジョーンズ・ビーチを25年間撮り続けたプロジェクトの出版を計画中。また、LAのギャラリー「M+B」ほか3軒のギャラリーでは、彼の写真作品を常設している。

M+B Gallery <http://www.mbfala.com/>  
Michael Hoppen <http://www.michaelhoppengallery.com/>  
Gitterman <http://www.gittermangallery.com/html/home.asp>



### The Thrills『TEENAGER』(EMI)

アイルランド・ダブリン出身のニューエイジロックバンド、ザ・スリルズが今年8月にリリースした新譜のカバーで、ザボのアーカイブ・フォトが起用された。『ティーンエイジャー』というアルバムタイトルからして、まさにザボの作品に影響を受けたと思われる彼らのルーツが感じ取れる



### (注5) JOSEPH SZABO 『TEENAGER』

2003年に出版されたザボのベスト版ともいえる写真集。70~80年代を中心に撮られたザボの教え子たちの日常が垣間見れる傑作。ザボの作品の中で一番手に入れやすい本といえる。序文を寄せているのはカメラマンクロウ



### 『ROLLING STONES FANS - JOSEPH SZABO』(PAM BOOKS)

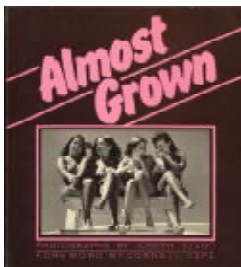
今年9月、PAM BOOKSから刊行されたザボの最新写真集は、1978年、フィラデルフィアで行われたローリング・ストーンズライブ会場のグループたちを撮影したドキュメンタリー集

## JOSEPH SZABO TEENAGE KICKS



### (注4) 『あの頃ペニー・レイント』(ソニー・ピクチャーズエンタテインメント)

2000年に公開されたカメラマン・クロウ監督/制作/脚本の傑作青春映画。クロウの実体験を元にした70年代、ロックが最も輝いていた時代に雑誌記者となった15歳の少年とグループの淡い恋心を描く。サントラの評価も高い。DVD¥1,480(期間限定) TM & © 2000 COLUMBIA PICTURES INDUSTRIES, INC. AND DREAMWORKS LLC. ALL RIGHTS RESERVED.



### (注3) BRUCE DAVIDSON 『Brooklyn Gang』

写真家のブルース・デヴィッドソンが、1950年代のブルックリンのストリートギャング「Joker」を極限の緊張状態の中で撮った傑作。彼の狂気な写真作品は、その後のドキュメンタリー・フォトのバイオニア的存在に。



### (注1)

Dinosaur Jr.『GREEN MIND』1991年にリリースされた通算4枚目、メジャーとしては一作目の傑作アルバム。J・マズシスのはぼソロユニットともなった最初のアルバムでもあり、爆音ギターの脱力ロックとして、90年代のグランジブームの中でヒットを飛ばした